

黙示録の記録

第19章

王の勝利

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

第 19 章 王の勝利

大いなる闘争の時代はほぼ終わり、バビロンは永久に消え去ります。創造主を敬わない世界の諸民族は、ハルマゲドンの戦いで最終的に敗退します。

天国と地獄との間での長い闘争の最後の戦いに、竜と獣と偽りの預言者は付き従う者たちを伴って敗走します。全能の主の日での最終対決の時に、全世界の王たちとその軍隊を集めるために、穢れた霊どもが解き放たれます（黙示録 16:13, 14）。大勢の途方もない軍隊がハルマゲドンからエドムにいたるまで、イスラエルを横切った縦隊で集結します。すでに全地で、特にエルサレムで、包囲や小競り合いが起こっています（黙

示録 14:18〜20 を見よ）。

戦いのための準備は天においても進行中です。聖なる天使たちが天に居り、携挙された聖徒たちもそこにいます。すべての者が地に下された激しい裁きを見つめていました。そして、彼らは主キリストが地上に帰

られる時、彼らの王に従って行進する時が、間近に近づいていることを知るのです。

創造主を讃える仲間

霊にあつて、ヨハネはそれを目撃しました。地上にもたらされる恐るべき災害と、ついで行われるバビロンを火で焼き尽くす決定的災害すべてを観察し、記録した後、ヨハネは、天にある都の神殿にある創造主の御座の周りで興奮し喜んでいられる大群衆に目を向けて、大いに安心しているのです。

黙示録 19 章 1 節　この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言つたのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの創造主のもの。」

以前、天の大群衆が大コーラスを鳴り響かせていることを、ヨハネはしばしば聞いていましたが、このように静かなことは決してなかったのです。これは力ある「ハレルヤコーラス」であり、この時、天のおびただしい群衆が、突然、思わず知らず、賛美の大合唱を始めます。

ハレルヤはアーメンと同じように多くの言語で同じく用いられていることばの一つです。ヘブル語では、hallal (賛美) と Yah (Jehovah の短音節) に由来し、「主をほめよ」と言う意味になります。それは詩篇に 22 回、特に、最後の五つの詩篇の各々の始まりと終わりの奨励に用いられています。

新約聖書では、この黙示録 19 章の 1 節から 6 節だけで 4 回出てきます。新約聖書には非常に多くの頌栄

が記されているのに、このただ一回の記述は、ヨハネが記している天にあるすばらしい光景に、詩篇のハレルヤの記述を結び付けようとしているためと言つてもよいでしょう。

前後関係は確かに適切です。詩篇は五つの書に分けられます。各々の書は頌栄のかたちの結語で終わっています (詩篇 41:1, 3, 7, 21:1, 9, 8, 9:5, 2, 106:4, 8, 145:2, 1)。それから、最後の五つの詩篇は詩篇全体に対応して美しいエピソードを与えて、人、天使と被造物のすべてが偉大なる主と救い主を誉めたたえるように勧められています。

いずれにせよ、天にある大群衆に主を誉めたたえるように勧める理由はたくさんあります。彼らは創造黙示録 4:1-11と贖い(黙示録 5:12, 13)の故にすでに主を誉めたたえていました。今、彼らは完全な解放と救いの故にも主を誉めたたえることが出来ます。

創造の故にキリストを誉めたたえる時、彼らは栄光と誉れと祝福をキリストに帰しました。贖いの故に主を誉めたたえる時、彼らは力と富、知恵と能力、誉れと栄光と祝福を主に帰しました。

ついに彼らは救いの故に主を誉めたたえることもできるのです。贖いの代価が払われただけではなくバビロンは壊滅し、サタンの全帝国は目の前で崩壊し、あらゆる災いから救い出されたからです。それゆえ、彼らは主に属する救いだけでなく栄光、知恵、力も主にありと大声で叫びます。ヨハネが患難期の終わりに幻で見る遙か前に、ヨハネは患難期の初期に既に、主を賛美し、主を讃えるこの大合唱を聞いていました(黙示録 7:10, 12)。いまや、殉教した聖徒たちの魂が復活した聖徒たちと共に天使たちに加わった賛美の大合唱となり、その幻は速やかに成就するのです。

バビロンに対してなされた恐ろしい報復で、創造主が完全に正しく真実の裁きをなされたとのあかしに続いて創造主に対する賛美が起ります。確かに、神経質な気質とあいまいな識別力しか持たない人がたくさんいます。彼らは、バビロンに対する創造主の聖なる怒りの激しさにたじろぎます。彼らは、バビロンによって、または創造主の聖なる御名に対するバビロンの穢しごとによって、創造主を敬う人々に加えられた残忍さを理解しないか、または関心がなかった人々です。これらの人々は現在の法の適用の緩和と同じような特質をもち、冷血漢に下される死刑に対しても、法の適用を緩和しようとしています。

バビロンの罪深さと創造主の聖さをともに経験している人々は、このように高慢な制限をしません。創造主は既にほぼ無限とでも言うべき長い間じつと侮辱をこらえておられたことと、主の恵みを欲しない者や主の愛に応えようとしない者にも哀れみを十分にかけてこられたことを知っています。バビロンとすべての住民は、彼らが強いて飲まされる苦い裁きの杯を最後の一滴までことごとく受けるのは当然で特筆すべきことです。彼らにとつて、これ以上の慈悲も悔い改めるようにとの招きもまったく役に立たないのです。

もう一度、バビロンの霊的売春、すなわち創造主に対する致命的な背信と反逆で、国から国を、時代から時代へと退廃させ、かつ滅ぼしたことを最後に思い出させる記念碑があります。永遠に火の池に住んでいる数え切れないほど大勢の失われた霊が、バビロンの人を崇める（人間中心主義、自然崇拜、進化論的汎神論の誘惑の故にそこにいるのです）。

創造主に復讐を日夜願う求める選民の願い（ルカ18：7、8）は遂に聴かれ、答えられます。主は「復讐は、わたしのすることである。わたしが報いをする」と約束されました（ロマ12：19）。待ちきれない聖徒たちは「いつまで」と叫んでいました（黙示録6：10）。しかし、長く耐え忍んでこられた主の忍耐が、「頑なな人の心に全く役に立たなくなる時が来ます。その時を知っておられるのは主お一人です。「さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つ（ヘブル10：27）」人を除いて、獣の刻印を押された地上の住人のためには何も残されないときが、遂にやってきます。

黙示録19章3節 19：3 彼らは再び言った。「ハレルヤ。彼女の煙は永遠に立ち上る。」

再び「ハレルヤ」の聲が天に鳴り響きます。短いですが、心に深く響く頌栄は、このようにして始まり、詩篇の五つのハレルヤのように（詩篇146：150）、ハレルヤの大合唱で終わっています。

天にいる群衆がバビロンの滅亡をなお喜んでいる間に、ヨハネは燃えているバビロンの煙は永遠に立ち上るとの悲しい観察を差し込んでいます。バビロンそのものは実際に火で焼かれますが（黙示録18：8）、バビロンを燃やす火そのものは永遠に燃え続けることはないでしょう。事実、18章で述べたように、バビロンの廢墟は最後には侵食した海の下に消え去るのです。

しかしながら、バビロンが燃えていた間、むくむく立ち上る煙は大気圏の実に高いところに達しました。雨が降り注ぐ高さから水蒸気が立ち上るように、地球の初めにあった水蒸気为天蓋を再構成するために対流圏のうえ高く上り、太陽の熱によって増強され放射され、ますます熱せられた雲の柱が、最後に成層圏の上

に押しやられ、その粒子は二度と地球には戻らないで、地球圏外に駆り立てられることでしょう。バビロンは地上の記憶からまさに徹底的に拭い去られるのでバビロンの焔焼によって生じた煤煙(すす)の粒子さえ地球の遥かあなたに移されるはずで。

二義的に、この節はバビロンの住人にも当てはめることができます。他の救われない魂に加えてこれらの人々は、最後の裁きのために甦る時、永遠に燃え続ける火の池に投げ込まれます。主イエス御自身は、「彼らのうじは死なず、その火も消えない」(マルコ9:44, 46, 48)と、その大変な終焉の住まいについて再三語っておられます。獣を礼拝し、獣の刻印を押された人々とその仲間も確かにバビロンの人々に組み込まれます。このことについて、天使は既に黙示録14章11節で「彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る」と警告していました。彼らもまた、バビロンが燃えて永遠に立ち上る煙のようにテサロニケ人への手紙第二章9節に「主のみかおの前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」と書かれてあるように、宇宙の最も遠くに移されるのです。この非常に恐ろしい日が来る前に(ヨハネが書いているようにその日は確かに来ます)バビロンすなわち、奥義である都バビロン、背教の世の偽りの宗教、将来文字通りに再建されるバビロンそのもの、獣の世界帝国の首都であるバビロンに住んでいる人々に、天から発せられた力強い声・差し迫った警告、注意を促しています。「わが民よ。この女からはなれなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。」(黙示録18:4)

黙示録19:4　すると、二十四人の長老と四つの生き物はひれ伏し、御座についておられる創造主を拝んで、「アーメン。ハレルヤ。」と言った。

天使の群れが大いなる賛美のあかしを終えた時、彼らの指導者すべては御座に着いておられる栄光ある方の御前に平伏します。24人の長老は贖われた聖徒すべてを表し、4つのケルビムはすべての聖なる天使を表します。天にあるすべての者は彼らを通して創造主を誉めたたえます。

聖書で礼拝は、創造主が言われることは真実で主がなされることは正しいと認めて、主のみこころに従うことを意味します。多くの長い年月が過ぎ去りました。その間、創造主は主の民の苦悩もバビロンの穢し事も気にかけていないように思われ、多くの人は創造主は死んだとさえ主張していました。

厳しい環境で抑圧され、出口を見出だせない傷心した信者は、しばしば、創造主の奥義と創造主がなぜ沈黙を守っているかを理解しようとして、涙をもってどんなに叫び続けてきたことでしょう。たとい道が暗く理由が分からなくても、このような時、素直な信仰で従う真の礼拝が意図されるのです。創造主の御心を推し量ることは困難かもしれませんが、主のなさることは、常に最善であり、いつの日か創造主のみ心はその完全な知恵と共にすべて十分に明らかにされるはずで。創造主の恵み深い長い忍耐のすべての過程を走り終えたとき、バビロンは消え去り、すべての祈りは応えられ、最後に、主の王国は来ます。その喜ばしい日に、喜びの涙と賛美の歌声をもって、最後に残った天にある聖徒たちすべては創造主を礼拝するのです。

普遍的礼拝の表現として二つの広く通用する叫びアーメン、ハレルヤほど相応しく心を打つ言葉はありません。「それならそれで良い―主を誉めよ」。創造主の御心は完璧だという事には最早何の疑いもありません。主は忍耐強く、だれ一人滅びることを望んでおられないのですが、主の日は来ます(IIペテロ3:9, 10)。天にあるハレルヤコーラスは続いています。そして、まさに起ころうとしていることの実現が大衆を通して押し

寄せるかのように、今や堂々とした最高潮へと高まりつつあります。

黙示録19章5節 また、御座から声が出て言った。「すべての、創造主のしもべたち。小さい者も大きい者も、創造主を恐れかしこむ者たちよ。われらの創造主を賛美せよ。」

御座からの声は確かに主イエス・キリストご自身の声です。『わが民よ』と呼びかけている黙示録18章4節の「天からの声」は、黙示録16章1節の「聖所からの声」と黙示録11章12節の「天からの声」のように三位一体のどの位格からの声であるかは定かではありません。しかし、確かに「創造主ご自身の声」でした。しかしながら、ここでその声は御座から来ます。そこに創造主が御座についています（前の節を見よ。小羊は御父と共に御座に着いておられるとあります（黙示録3:21,5:13,7:15,17,22:3））。

救い主の声としてその声が同定されることは、創造主を讃えるための命令によつて確かめられます。聖書の大きいなる「賛美の書」詩篇に、大きいなるメシヤ詩篇の22章22節に予言的に記された、キリストの十字架上での苦しみがまさにその頂点に達した時、動詞「賛美する」（ヘブル語 *יָמַח*）がはじめて出てきたのです。ここで、受難の主は「私は、御名をわたしの兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。主を恐れる人々よ。主を賛美せよ。」（詩篇22:22,23）

「大会衆」のまん中で、ほふられた小羊が、我々の偉大な「賛美リーダー」となり、創造主の僕たちすべて、主を畏れる人々、創造主の霊的すえである人々（詩篇22,25,30と比較せよ）に創造主を賛美するように熱心に勧めているのです。すべての贖われた者がそこについて「主の僕」であり、地上での生涯で彼らの立場が、偉

大であった者も取るに足らない者であっても、主の僕は創造主が創造する新しい地球で永遠に「創造主に仕える」のです（黙示録2:3）。しかし、まず、主の御前で、大きいなる賛美の時を持ちます。それから、結婚式、そこで彼らは「いつまでも主とともにいる」（1テサロニケ4:17）ことが認められるのです。

黙示録19章6節 また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの創造主である主は王となられた。」

その時、ヨハネは大会衆に対する主の勧めに答えて、天に鳴り響く力ある賛美のコーラスを聞きます。ここの「大群衆」ということばは1節の「多くの人々」と言うギリシャ語と同じです（黙示録7:9にあることばとも同じです）。

彼らの賛美は、彼らの個人的救いとバビロンからの救出だけではありません。最早彼ら自身に焦点をあわせるのではなく、彼らは創造主の栄光に富んだ人格と、創造主が宇宙の御座に合法的に着かれた事を喜んでいます。

主の声は多くの水の音のようであり（黙示録1:15,14:2）、激しい雷鳴のようで（黙示録14:2）、今や、主によつて贖われた群衆の賛美の音が同じように荘厳な響きを奏でています。聖徒たちはキリストに似た者となつており（1ヨハネ3:2,3,ピリピ3:20,21）、彼らの一致した声の響きそのものさえ同じ美しい栄光の賛歌を鳴り響かせています。

これは黙示録19章の四度目の「ハレルヤ」で最後です。ハレルヤに続く大きいなるあかしは、創造主の王

国と小羊の婚姻についてのことばです。同様に、「主を誉めよ」(すなわちヘブル語でハレルヤHalleluia)が始まっている。各々の詩篇が、詩篇のクライマックスである五つの偉大なハレルヤ詩篇に引き継がれ、初期のテーマ、すなわち、創造主が永遠に君臨する来るべき支配と、主がお造りになったすべての被造物、特に、贖われた聖徒と主の終わりなき結合と交わりになります。

小羊の結婚

黙示録19章は確かに聖書の頂点に置かれた章の一つで、同時に、すべての文芸作品のうちで最も優れたものの一つです。キリストと花嫁の長く待たれた結婚に対し、天における素晴らしいハレルヤコーラスから始まって、ついで主の栄光溢れる地球への帰還、最後にこの時代の大激戦に、この驚くべき章は壮大なテーマから他の壮大なテーマへと進みます。そして、人の長く悲しかった時代の終局でクライマックスに達し、創造主の栄光に富む御国を地球に齎すのです。

この壮大なテーマの第二は天でのコーラスで導き入れられます。天にある花婿が果てしない祝福のうちに花嫁と結び合わされる時が近づいたのです。花嫁は花婿が創造主の穢れなき小羊としてカルバリーにて御自身の血をもつてずっと昔買い取った人々で彼らが花嫁です。遂に花嫁は準備が整い、結婚の歌が始まります。

黙示録19章7節 私たちは喜び楽しみ、神(創造主)をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。

賛美の後に、喜びが来ます。天における「大群衆」は、創造主の偉大な力と今にも来る御代の故に主を賛美し、すばらしい頌栄を鳴り響かせていました。だが、それはそれとして、創造主の御国が来ようとしているとの意識が突然現実のものとなったのです。言ってみれば、御子の御旨に沿った結婚はまた来ようとしています。そして、このことが言い表せない大変な喜びを引き起こします。うれしさのさなかにあっても、彼らは花婿の天の父に栄誉を帰する注意深さを持っています。御子(御父が愛する)は花嫁(花婿が愛する)に与えられています。時代から時代へと、主は待つておられ、遂に花嫁の準備は整い、結婚の日時が決められ、婚宴の席がまさに準備されようとしています。

時間が限られた世界と永遠の世界、人と創造主の壮大な結合は、常に結婚制度そのもので描写されているのです。男と女が初めに創造された時、創造主は御自身でお創りになった宇宙の構成要素である地のちり(諸元素)から人の身体をお創りになりました。次いで、男の生ける肉と骨(または、おそらく骨と肉を維持している血液)から女の身体を造られました。それから「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、二人は一体となるのである」(創世記2:24)と厳かに宣言がされたのです。

主イエスはこの文節を文字通りに取り、人を創造された方は結婚(それゆえ家庭と家族の制度)を永続的で一夫一婦制を意図していた御自身の教えの基礎として用いました(マタイ19:3-8、マルコ10:2-12参照)。更に重大なことに、結婚は永続するだけではなく、キリストと教会の解除できない完全な結合であったことを使徒パウロが示しています。結婚はエペソ5章22、23節の美しいテーマです。たとえば、「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリス

トがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなもの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです（エペソ5:25〜27）。ついで、創世記の記録から引用して、「私たちはキリストのからだの部分だからです。『それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。』この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。」（エペソ5:30〜32）と述べています。この美しい事実を直接示す比喻が、キリストと花嫁である教会の結合を取り扱った新約聖書のここにまたとない完璧さで表されています。しかも、この関係は聖書全体によく見られる内容です。

たとえば、主は、イスラエルの民を御自身の妻として愛情を持って愛したが、不誠実で姦通の妻であったとしばしば述べています。ホセアの預言は、主としてこの概念を中心にまとめられています。イスラエルを彼らの不誠実の故に責め咎めた後で、預言者は「彼女は恋人たちのあとを追って行こう。しかし、彼らに追いつくことはない。彼らを捜し求めよう。しかし、見つけ出すことはない。彼女は言う。『私は行って、初めの夫に戻ろう。あの時は、今よりも私はしあわせだったから。』」（ホセア2:7）と述べています。

それから、最後にイスラエルが主の下に帰った時（既に患難期を通して起こることを見たように）、主は過ちを犯した「妻」を主の愛の交わりに戻ることを喜んで受け入れます。「わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。（このとき、あなたは主を知ろう）」（ホセア2:19、20）。

同じように、エレミヤは「見よ。その日が来る。——主の御告げ。——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——主の御告げ。——」（エレミヤ31:31、32）と述べています。

イザヤもまた「あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。あなたの贖い主は、イスラエルの聖なる方で、全地の創造主と呼ばれている。」（イザヤ54:5）と同じような描写をしています。

新約聖書の中で、「というのも、私は神（創造主）の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。」（IIコリント11:2）と、教会はキリストの清い忠実な花嫁と象徴的に述べられています。

この将来の大いなる結婚を説明するに当たって、回復された主の妻としてのイスラエルと主の乙女である花嫁としての教会との間に明確な区別がなされているのかどうかは、解説者間に長い間一致できない問題でした。姦通の妻と大切な花嫁との間には確かに差はあると言っても、比喻的表現の範囲で、キリスト降誕前と後に生きていた個々の信者間には実際にそんなに確たる区別はありません。丁度今日妥協的クリスチャンが大勢いるように、古代イスラエルにも創造主を敬う忠実なユダヤ人がたくさんいました。

この将来来る素晴らしい集合にあたって、どんなに繊細な区別がなされようと、最も重要な原理は確かにキリストとその民の最終的完全な永遠の結合です。すべての罪は追放され清められています。そして、ユダヤ人と異邦人とを問わず、復活された聖徒に関する限り、完全な交わりが回復されるのです。おそらく、地上にあるイスラエル人の復興（すなわち、患難期を生き抜いて肉体を持って千年期に入る）は、キリストとすべての栄化された信者の天にある結合の地上への反映のようなものです。このように、地上で回復された妻は天において新しく結婚した花嫁の型です。

あかしは、また「彼の妻は彼女自身で用意している」と言っています。地上にあつて不忠実な妻・イスラエルは、竜の面前から逃れ荒野における大いなる内省（自己反省）の時に患難の炉を通して清められ、彼女自身の用意が整うことでしょう（黙示録12:6）。キリストが御自身の民のところに力と大いなる栄光をもって帰られ、彼らが突き刺した方を見る（ゼカリヤ12:10）時、彼らは全き悔い改めと信仰を持ってキリストに余すところなく徹底的に従います。

同時に、天にあつては、キリストの裁きの座で、携拳された聖徒が清められ、キリストに似たものとされています（1ヨハネ3:2,3、ロマ8:29）。その姿で、花嫁は花婿に会うために用意され、永遠に花婿に結び合わされるにふさわしい花嫁の衣装を着せられます。

黙示録19章8節 花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。」

白くて綺麗なきよい麻布の着物は、もちろん花婿に付き添う花嫁の完全な準備を物語っています。古い衣服は捨て去られており、花婿の聖なる面前に永遠に入るかのようにすべては新しく混じりけのないものです。「わたしは主によって大いに楽しみ、わたしのたましいも、わたしの創造主によって喜ぶ。主がわたしに、救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださいからだ。」（イザヤ61:10）

かつては綺麗で魅力的だった自己義認の花嫁の古い着物は、彼女の目にさえ不潔な着物になってしまいました。白くて綺麗なきよい麻布の着物は、もちろん花婿に付き添う花嫁の完全な準備を物語っています。古い衣服を喜んで身につけています。「私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、創造主のために実を結ぶようになるためです。」（ロマ7:4）

男でも女でも主イエス・キリストによって提供された無比の贈り物を受け入れる時はいつでも、というのがやり方です。キリストは私たちの行いによるのではなくわたし達を救います。なぜなら、わたし達は良い働きをするためにキリストにあつて造られたからです（エペソ2:9,10）。それから、わたし達が歩むべくキリストによってあらかじめ定められていた良い行いが、順次、「聖徒の義」をもたらすのです。

ここでの用語は複数形で、「聖徒たちの正しい行為」と訳すほうが良いのです。ここにパラドックス（逆説）、全く現実であるパラドックスがあります。信者は誰一人自分の義の行為によっては救われなし、創造主の面前に立つにふさわしいとされる者は一人もいないのです。それでも、信仰と恵みによってひとたび救われると、それから彼は義に歩むことが出来るとともに義に歩むように強いられます。そして、ある驚くべき変化にあつてこれら義の行為が創造主の民のために救い主によって用意された綺麗な白い麻の義の衣となるのです。

奥儀なのかそうでないのか、嬉しいことに、かの日にそれは明らかになります。はかり知れない恵みで、主イエスは主の名によって行ったすべての義の行為のゆえに私達に報いて下さるのです。そして、これらの義の行為が私達に主の面前に立つ備えをさせます。それでも、創造主御自身がご自分の花嫁のために買い取り準備した救いの着物と義の衣を驚嘆すべき方法で同一視出来るのはまさにこれらの行為そのものにあるの

です。

さらに、すべての罪と自己義認の残りかすは、天にあるキリストの裁きの座でさらされ、裁かれ、清められました(Ⅱコリント5:10)。こうして、キリストの花嫁は自分で準備し、きれいな衣で主についていくのです。

黙示録19章9節 御使いは私に「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい。」と言いき、また、「これは創造主の真実のことばです。」と言った。

彼についての直前のことばは明らかに「御座からの声」ですから、ヨハネが見聞きしていることを書き記せとヨハネに対する命令を主ご自身が更新しているのはこの時点と取っても良いかも知れません。しかしながら、その指示は、多分、天使から来た(10節を見よ)と思われれます。これは、ヨハネ以降に起こされる全世界のクリスチャンの手引きであり、勇気づける為に記された将来起こる歴史の真の記録です。

この時点でヨハネが特に書くように勧められたのは、黙示録の七つの大いなる至福の第四のものでした。それはその時代に苦しみにあっている聖徒みなにとって大いなる祝福と力づけになるはずで、天にある花婿と栄光ある将来の結合を予想して成長しつつあるキリストの教会(花嫁)の会員になるべく一人ひとりを促すのです。

「結婚」または「結婚披露宴」の図は、その結合を生き生きと描くのにもう一度用いられています。小羊の「結婚」は7節で、小羊の「婚宴」は9節のここに述べられていますが、これらのことばの用法とヨハネの時代の結婚の慣習では、結婚と結婚披露宴は本質的に同じと見做されていました。

結婚は通常実際の結婚のずっと前に両親によって取り決められていました。結婚の契約は花嫁の両親が嫁資を払うことによって成立したのです。数ヶ月、おそらく数年たったとき花嫁と花婿は結婚の準備が整い、披露宴の日時が定められます。定められた時、花婿と友達は花婿の家から花嫁の家に自分の花嫁を要求するために出かけます。

そこで、彼の大切な乙女である花嫁は、花婿の父親が大金を出して準備した豪華な披露宴と一緒に付いて行く彼女の友達(すべて乙女)と共に彼が来るのを待っています。花婿の到着を待って、彼女の両親が花婿に花嫁を手渡しします。そして、彼は、大いなる喜びと期待を持って彼女を家に連れ帰ります。彼らの友達が彼らについて行き、花婿の父の家での幸せな結婚の祝いに加わるのです。

もし創造主の理想的結婚の計画が受け入れられ、彼らがそれに従うなら、その時から、花嫁と花婿は結び合わされ、死ぬまで決して別れません。こういうわけで、結婚披露宴で結婚を完成するのです。

明らかに小羊の結婚の注目すべき描写の中で期待されているのはこの美しい習慣です。結婚は、ずっと昔から約束されてきました。その時、天に居られる父が、失われた人の世界から御子の花嫁を求めたことを企てられました。しかし、この場合、花嫁は夫のために提供する嫁資もなく、このような結婚にはまったく値しなかった。それゆえ、御子はその値をご自身で払うと申し出られた。御子は、世の罪を取り除く創造主の小羊になられ(ヨハネ1:29)、御子の流された血潮は、御父の家に入るにふさわしく花嫁を整える買取の値となったのです。救いの着物・御子によって備えられた彼女の義の衣が、彼女の穢れた衣と置き換えられました。そうして、彼女は御子が信頼する花嫁になりました。

しかしながら、御子が花嫁を当然の権利として実際に要求できるまで長い時間かかりました。遂に、その

日が来、彼女の両親の家から御子は御自身で彼女を受け取られ、彼女を結婚の場に伴われた。携挙と実際の結婚披露宴の間にあるその途上での余暇は、まじわりの時であり、また、キリストの裁きの座に出頭するのに当たり、キリストの臨在でさらに浄化し清める時となります。しかし、今や遂に、結婚の時がきたのです。結婚披露宴の図式はキリストのたとえでよく知られています。たとえば、マタイ22章1・14節(また、ルカ14:16,24)のたとえで、イエスは、「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。王は、招待しておいたお客を呼びに、僕たちを使わしたが、彼らは来たがらなかった。」勿論このたとえの主な皮肉は、キリストの招きを拒否した人々に向けられています。王子の結婚式にはみなが招かれていました。しかし、多くの人々は王の慈悲深い招きを丁重に断ります。言い訳は何でも、王を満足させることはないのです。そこで、結婚の披露宴に来る人々を見出すため大通りや通りに僕を送り出した。結婚の披露宴が最後に整った時、「宴会場は客でいっぱいになった。」(マタイ22:10)。さらに、主人は、彼ら自身の着物がどんなに裂けて穢れていても婚禮のためにふさわしい適当な礼服をみなに準備した。一人の人が礼服を着ないで出て来た時、彼は放り出されました。彼は他のすべての人のように招待されました、そして、招待の型どおりの要求を拒否しました。そして、自分の要求に基づいて参加することをを選び、それをよしとしたのです。勿論、これは不可能です。それゆえ、まったく来ようとさえしなかった人々すべてと共に放り出されるのです。

十人の乙女に関するキリストのたとえに、婚宴の席に関連しているが異なる強調点が見出される文節があります。「そこで、天の御国は、灯(ともしび)を持って、花婿を迎える十人の娘のようです。そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。」(マタイ25:1,13)

愚かな娘は、王の結婚に参加する大いなる特権に対し、準備という直接の関心事と慰めに余りにも気を囚われて、近視眼的であった。彼女たちは招待を断っていたし、事実、花嫁自身の付き人になる計画であったが、彼女たちに提供されていた大いなる機会に対する適当な準備をするための関心を十分に持ち合わせていなかった。気前のよい主人は、彼女たちが着るための必要な礼服を贈ったが、彼らのランプのための油は送らなかつた。彼女たちには十分な準備の時間があったが、準備する代わりに眠っていた。そして、花婿が不意に彼女たちのところに来たのです。「そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼と一緒に婚禮の祝宴に行き戸が閉められた。」愚かな娘たちが遂にやって来た時、花婿は彼女たちに「私はあなた方を知りません。」と言った。

先のたとえでは、彼ら自身の選択によって、多くの人は披露宴から除外された。第二のたとえでは、加わろうとしていた人々の半分が彼ら自身の怠慢によって除外された。その立場を得ようとする人々は彼ら自身の選択で、すなわち、招待状の条件に彼らが従うことによって、そして必要とされる準備に精励することによって、そこに居るのです。三つ(招待状、条件を受け入れること、準備に精励すること)すべては、大いなる披露宴に参加するすべての人にとって重要な資格です。

多くの仲介者がランプの油は、聖霊によって生まれ変わっていない自称クリスチャンを意味する娘たちを除外することで、聖霊を象徴すると考えています。しかし、それは二つの理由で疑わしいのです。第一に油が聖霊の象徴であることを述べているところは聖書のどこにもありません。十人の娘についてのこのたとえで、油がこのように何かを象徴していることを示唆するものはまったくありません。第二に、個々人のうちに聖霊があるかないかは彼自身の努力によるのではなくて、たとえば市場に行つて油を買うことの必要を語つ

ているのです。真のキリスト者はだれでも、救い主としてキリストを信じる、即ちキリストの義の「着物」を受けることを通して同時に聖霊を受けます。それ以外の方法で聖霊を受けることは出来ません。

同時に、「行いのない信仰はむなし」(ヤコブ2:20)のです。主に對する無頓着さよりむしろ注意深い霊的「知恵」によって、真の信仰は特に立証されます。娘たちのたとえで、用語「賢い」は、ギリシヤ語の *phronimos* で、文字通りには「考え深い」と言う意味です。用語「愚かな」(ギリシヤ語 *moros*) は「不注意な・無頓着な」の意味です。愚かな娘たちは、主に對する無関心な態度で、実際に主を知っていなかった(したがって、主も彼らを知らなかった)ことを証明しているのです。

総括すると、このたとえとそれに関連した聖書すべてで首尾一貫した教えは、小羊の婚宴の席に加わる人々は、福音の招きに真の信仰を持って応答し、創造主の事柄に考え深く配慮する態度によって内的信仰が外に現れている救われた人々すべてです。彼らは聖徒の「正しさ」(黙示録19:8)を物語る清い、白い麻の衣を着ているすべての人々です。

もしあれば、披露宴の客と花嫁の付き人との間の、またはこれらの人々と花嫁自身の区別は何でしょうか。多くのまた発明の才ある人々は、解釈を提出してきましたが、これらのどれも聖書自体から提供されているものではありません。キリスト来臨の前と後の両方に救われたすべての人がキリストとともに居て、創造主の王国でキリストとともに飲み食いすることは確かです。「あなたがたに言いますが、たくさんの方が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。」(マタイ8:11、またルカ3:29を見よ)。「ただ、言っておきます。わたしの父の御国で、あなたがたと新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」(マタイ26:29)。

さらに、新しいエルサレムがキリストの花嫁であることは、確かに証明されます(黙示録21:9)。それは救われたすべてのものの永遠の住まいであることは確かなので(黙示録21:24)、救われたすべての人は集団でキリストの花嫁を構成します。しかし、この都には12の門があり、その門にはイスラエルの12部族の名が、その上、12の土台石には小羊の十二使徒の名が刻み込まれています(黙示録21:12, 14)。このことは都の中には古代イスラエルの贖われた人々とキリストと以後の教会の贖われ救われた人々の両方が居ることを意味します。そして、次には、これらすべての人はなぜか「花嫁、小羊の妻」の一部分なのです。

それゆえ、花嫁は彼女の付き人と彼女の客をも代表し含みます。たとえで用いられている象徴は、その目的を超えて拡大解釈されることはありません。真のメッセジは、すべての時代の創造者であり贖い主として、真の創造主を信じる総ての者は、いつの日か創造主との完全な交わりを回復し永遠に結び合わされることを伝えているのです。結婚の披露宴は栄光に富んだものとなり、婚宴の席に呼ばれたすべての人は実際に祝福されたものとなります。

アブラハム以前の聖徒とキリストと以前のイスラエルにいた聖徒とアブラハムからキリストまでの異邦人の中に居た聖徒と患難期の聖徒とキリストから携拳にいたる教会にいた聖徒の間にどんな区別があるのだろうか。(確かに来るべき時代までこれらは区別できるグループとして続くでしょう)このような区別はキリストの救いの業、真の創造者なる主に對する個人的信頼と救いについての創造主の準備によってそこにいるという元来の大いなる真理に次ぐ二義的なものです。ただ唯一の創造主が居られます(唯一の創造主はイスラエルと感情を共にすることはなく、唯一の創造主は教会と交わります)。三位一体の創造主は全時代を通して贖われた聖徒すべてと永遠に個人的交わりを保ちます。創造主は聖なる都で彼らとともに永遠に住むのです(黙示録21:2, 3)。

この重大な結合の祝福とそれに伴う祝宴は非常に素晴らしく実に大切なので、これら語られたことは真実である、とヨハネにもう一度強調しているのです。なぜなら創造主がこれら企画の創始者なのだから。後に出てくる二つの場合、同じような保証の主張がなされており（黙示録21:5、22:6）、これら三つの場合すべては、栄光のうちに贖われた者の祝福を物語っています。このような約束は、創造主自身からであるとの特別な保証を請合うものとして最高に重大なものと看做されているのです。

黙示録19章10節　そこで、私は彼を拜もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っている多くのあなたの兄弟たちと同じしもべです。神（創造主）を拜みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。」

すばらしい光景を通してヨハネに伝えた力ある天使があまりにもすばらしく、かつ天使の啓示が実に圧倒的だったので、使徒ヨハネは突然強い衝動に駆られて、天使の前に膝まづき拜もうとした。ヨハネは後で、同じ過ちをもう一度（黙示録22:8、9）しました。二つの場面で、天使は創造主だけが礼拝されるべき方であるとヨハネに気付かせたのです。常に礼拝されなくてはならないのは、創造されたものとか生き物ではない、最も偉大な人物や最も高く上げられた天使でさえない。礼拝は創造主だけにすべきなのです。（すなわち、文字通りには、内的力と権威に基づいてただ他者の意思を行うために「お辞儀をする」の意です）

これは、確かに、力ある天使でしたが、彼は、ヨハネと共に、礼拝さるべき唯一の方の同じしもべに過ぎないと主張しています。天使はただ奉仕する（すなわち、仕える）霊（ヘブル1:14）です。事実、天使は、文字通り創造主のみ心をなすために完全に完全にささげきっているヨハネと同じ僕同士であるところで主張したのです。ヨハネやクリスチャンである彼の兄弟たちのように、天使自身は、彼らが公言している同じ「イエスのあかし」を保持し宣言しているだけで、それ以外の何者でもないというのです。

この節は、普通の「キリストのあかし」または「イエス・キリストのあかし」という節より多少異なる言外の意味を含んでおり非常に大切です。ここでの強調点は、創造主の人としての名前です。こういう訳で、あかしは特別に、創造主の人間性とかかわっています。天使はキリストが全知全能である事実をとことん良く知っていました。事実、天使はキリストが創造主であって、それ以外の何者でもないことを知り信じていました。したがって、「創造主の御使いはみな、彼を拜め」（ヘブル1:6）。キリストの創造主としての御性質については何の疑問もありませんが、創造主が人となられたことは信じ難く聖なる天使と創造主を敬う人々の忠節と絶えざるあかしを必要とします。反逆した天使、悪しき霊が妨害するのがこのあかしです。そして、患難期の聖徒たちが首をはねられたのは、この「イエスのあかし」のためでした（黙示録20:4）。

ヨハネの書簡ですでに反キリスト（1ヨネ4:3）として認められていたのは、この極めて貴重な受肉（ヨハネ1:14を通して、ことばは人となって）の重要な真理に反対する霊のことでした。そして、今や、イエス・キリストのあかしを持つすべてのものを滅ぼそうとしている（黙示録12:17）反キリスト自身を見ていました。「イエスのあかし」は真の予言の霊です。それは偽りの霊のあかしに矛盾します。「愛された」ヨハネは、「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神（創造主）からのものかどうかを、ためしなさい。……人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神（創造主）からのものです。それによって神（創造主）からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神（創造主）から出たもの

ではありません。」(ヨハネ4:1-3)「偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。」(ヨハネ2:22)と警告しています。

力ある天使がヨハネに彼を認めるように切に願ったのは、将来の裁きに關しての驚くべき啓示をヨハネに示す特権を与えられたことではなく、イエスのあかしに對する天使の忠実な宣言に對してです。天使にとって、すべての啓示のうち最も驚くべきことは、全権を持つ創造主がご自身の民を罪から救うためにイエスなる人になられたことでした。

王の王

聖徒たちは、今や、みな婚禮の披露宴に招かれており、光り輝く、きれいな麻布の相応しい礼服を提供されてきました。しかし、披露宴自体は地上で行われなくてはなりません。そして、地球はなお地の王たちの支配下にあります。地の王たちとは、竜と獣と偽りの預言者たちです。バビロンは滅ぼされていますが、王たちの軍隊はハルマゲドンに集まっています。彼らはキリストがまさに地上に帰ってこようとしている事と、キリストが主権を取り戻すのを妨げるために最後の総力戦を地上で行う決定が下されていることを知っています。

そこに集まったのは多くの軍隊だけではなく、この世の神、彼らの主人サタンに従う、あらゆる闇の支配と権力もそこにいます。彼らは彼らの時が来て、有史以来の天下分け目の戦いに参加しようとしているのを知っています。

黙示録19章11節　また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実。」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。

ヨハネは以前「開かれた天」をしばしば見てきましたが、このような光景を見たことは決してなかった。天の都にある神殿から抜け出した一頭の大きな白い馬と王者のように威厳のある乗り手が、光り輝く聖徒の軍隊をひきつれて現れた(14節)。

これは患難期が実際に始まるうとしていた時、ヨハネが征服し続けるのを見ていたのと明らかに同じ象徴的白い馬と乗り手で(黙示録6:2)、今や、最後の勝利をもたらす大なる出来事に向かつて出発するのを見ます。前の幻では、乗り手が誰であるかその身元を明らかに示せなかったが、ここで、この方は「忠実また真実」な方として公に宣言され、彼の勝利の戦いは完全な義に基づいており、彼の刑罰に關する裁きは創造主の清さに基づいていた。

彼は「忠実で、真実な証人、創造主に造られたものの根源である方」(黙示録3:14)なので、彼は忠実で、真実と呼ばれています。彼は創造主のことは保ちます。なぜなら、創造主のことは真実だからです。彼は実に忠実で実に真実です。そして、彼は真実で忠実なので、正義にあって行動しなければなりません。彼は哀れみと恵みの長い年月の後、遂に、裁判官であると同時に軍人として行動しなければなりません。彼は、裁判官として判決を宣言し、軍人としてそれを実行します。反逆者たちは有罪と宣告されています(事実、計画的に行ったことで、彼らは自分自身を有罪と判定しています)、今彼らは死刑に処されなくてはなりません。

この項に書かれているように、これは、イエスが力と大いなる栄光のうちに地上に帰られる時の主イエスにぴったりと一致するすばらしい三つの名の最初で、イエスの名は「忠実また真実」(1節)、ついで、「創造主のことば」(3節)、そして、最後に、「王の王・主の主」(6節)として認められます。

黙示録19章12節 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。

大いなる白い軍馬にまたがったこの勝利し続ける指揮官が誰かは疑いの余地もありません。彼の目はヨハネがはじめ(黙示録1章4節)に見ていたのと同じ炎(ほのほ)のような目でした。その時、ヨハネは彼を人の子として認めています。しかし、今は彼の雪のように白い頭に美観を添える多くの冠があつた。これらの冠は、長老たちが御座の前に投げ出した冠と同じものではなかつたし(黙示録4:10)、彼が勝利を得ようと馬に乗って出て行った時与えられた冠でもなかつた(黙示録6:2)。黙示録4:10、6:2に出てくるこれらの王冠は、ギリシヤ語 *stephanos* の訳で、彼が勝利の凱旋行列でつけていたこれらの王冠はギリシヤ語 *diadema* で、それはかつて地の王たちによって横領されていたものであつた(黙示録12:3、13:1、17:9、12)。

彼が創造したものを奪い取つた支配者はもはや所有権を持っていません。その権利を持つのは誰でしょうか？ 彼です。彼は創造主としてだけでなく贖い主としてその権利を持っています(エゼキエル21:26、27)。小羊として、彼は地上の所有者であることを伝える巻物の封印を解くに値する唯一の方(黙示録5:9)で、大いなる一連の穢れを取り除いて清める裁きを引き起こし、反逆する王たちから遂に支配を取り去ってしまう方です。いま、彼は勝利し馬に乗って前進するとき彼らの王冠を身につけています。「雄々しい方よ。あなたの剣を腰に帯びよ。あなたの尊厳と威光を。あなたの威光は、真理と柔和と義のために、勝利のうちに乗り進め。あなたの右の手は、恐ろしいことをあなたに教えよ。」(詩篇45:3、4)。

名前は明らかに王冠を横切つて書かれていたのです。ヨハネはその書かれた物を見ることが出来たが、文字を判読することは出来なかつた。そればかりでなく、誰もこの名を読むことは出来なかつた。死すべき人の限界を超えた、明らかに何か天使の筆跡のような文字で書かれていた。このくんだり(11、13、16節)には、彼について書かれた名以外の名は一つもなかつた。なぜなら、これらすべての名は信じているものにはみな良く知られていたからであり、それは恐らくすべての名にまさる名で(ピリピ2:9)、その名イエスではなくて、イエスに与えられた名であつた(ピリピ2:10文字通りの意味)。イエスが死から甦つた時、「すべての支配、権威、権力、主権の上にそしてすべての名の上に」(エペソ1:21)高く上げられました。

聖書の中で主イエス・キリストに割り当てられた名は多くて美しい(光、主人、メシヤ、イスラエルの王、人の子、創造主の御子、創造主の小羊、平和の君のように)。これらをいっしょにしたすべてをもつてしても、イエスの名の無限の意味をことばで言い表わし、論じ尽くすことは出来ない。私たちは、多くの驚くべき属性で彼を知っているが、彼の計り知れない完璧性を決して知ることは出来ない。彼はすべてであり、すべての中にいます。栄光あるよみがえりに与かつてさえ、彼に関する知識はたしかに永遠に成長し続けるにしても、私たちはイエスに関するすべてを学ぶことは決して出来ない。イエスの力ある名の満ち満ちたさまは、イエスだけが知っているのです。

黙示録19:13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「創造主のことば」と呼ばれた。

血に染まった衣類は、勿論、彼の敵が流した血を物語っています。前に言及したように、大きな谷が、馬の轡に届くほどに王たちの軍隊から流れ出た血で満ち（黙示録14:20）しており、大量の殺戮の谷を通って勝ち誇って馬に乗って彼は見えている。エドムの南端（イザヤ63:1）から始まって、北のほうエルサレムにさらにハルマゲドンにまで彼は馬に乗っていく。「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」（イザヤ63:2）。

ここに写実的な象徴化とありのままの現実の見事に交じり合った状態があります。勿論、天にある馬は象徴的幻かもしれません。勿論、それから、血に染まった衣類もそうかもしれません。しかし、殺された大勢の人々は本当であり、征服しつつある贖い主も現実の存在です。これは、テトス2章13節にある「大いなる創造主であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われ」です。これは「天における人の子の大いなるしるし」です。その時、すべての人は「地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見ます。」（マタイ24:30）。

王者のような乗り手がエルサレムに到着する時、「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリブ山の上に立つ。」（ゼカリヤ14:4）、そうして山は二つに裂けます。「わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。万軍の主は仰せられる。」（ハガイ2:7）。「だが、この方の来られる日に耐えられよう。だが、この方の現われるとき立っていられよう。まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。」（マラキ3:2）。「主イエスが、炎の中に、力ある

録21:3-6）。

御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、創造主（神）を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」（Ⅱテサロニケ1:7,8）。

主の栄光ある出現に当たって、力ある征服者は受肉した「創造主のことば」・御子イエス・キリストに他ならないことに思いをいたすのは当然です。主のことばによって天は造られた（詩篇33:6）、そして、永久の世界が造られた（ヘブル11:3）。同じみことばによって、天と地は保たれているのであり（Ⅱペテロ3:7）、初めにあったそのことば（ヨハネ1:1）は、またオメガであり、その民と共に永遠に住まうのです（ヨハネ1:14、黙示録21:3-6）。

黙示録19章14節 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。

地上の首都の街路を勝ち誇った軍隊の先頭に立って進んでいる力強い將軍のように、勝利を得た騎手は先頭に立ち、それにつき従うものは皆輝く白い軍服を着、美しい白い馬に乗った実に多くの勇士たちで、絶えることなく続きます。ヨハネが見た輝かしい光景・きれいな麻の着物は小羊に付き従うこれらすべての人の行為が正しいことを象徴しており（8節）、行列全体は、主が地上に遂に帰ってこられる時の空前の主の栄光と尊厳をヨハネと我々に示すようにヨハネに与えられたものです。

馬と白い麻の甲冑は象徴的だが（恐らくこれらは文字通りでさえあり得る…創造主は確かにご自身が聖なる力を与えられたごような種類の生物でも確かに選び、お造りになることが出来る）、それらは地上で実際に起こる大いなる勝利と凱旋（家に帰る状況 home-coming）を物語っています。主イエス・キリストと大勢の贖われた人々は、空にある御座の所から下って

来ます。そこから主イエスは、患難期の出来事を導き、そして、裁きを完了する最高潮の短い戦いで獣の軍隊を徹底的に打ち破り、地上に主の王国を確立します。

この聖徒を伴った主の栄光ある来臨は、歴史の黎明期から予言されていたのです。「アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう語っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神（創造主）を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神（創造主）を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」（ユダ14、15）

この重要な事件は、イスラエルの預言者によって同じように予言されていたのです。「主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。……主は地のすべての王となられる。」（ゼカリヤ14:3-9）。「聖徒たちは栄光の中で喜び勇め。……彼らの口には、神（創造主）への称賛、彼らの手には、もろ刃の剣があるように。それは国々に復讐し、国民を懲らすため、……また書きしるされたさばきを彼らの間で行なうため。それは、すべての聖徒の誉れである。」（詩篇149:5-9）。

同じように、使徒たちも「また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神（創造主）の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。」（1テサロニケ3:13）予言していました。創造主に従う天にあるすべての天使の軍勢と贖われ清められた創造主に従う実に大勢の聖徒たちが彼らの勝利した贖い主と共に地上に戻ってくる時、それはどんなにすばらしい行列になることでしょうか。古い蛇・この世の神が支配した長い時代の後、彼の暗闇の権威とキリストを拒否している人々の手先の軍団によって荒廃し疲弊しきって弱りきった地球から、不純物は最後に取り去られ、浄化されます。そして、キリストが実にこれ以上はあり得ない至上の統治をします。

黙示録19章15節 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神（創造主）の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。

ヨハネはこの鋭い剣（黙示録1:16）、すなわち、怒りに満ちた人の子の口からほとぼり出る死に至る裁きのことばの突き通す鋭さを以前から預言を通して見ていました。イザヤ書では「口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。」（イザヤ11:4）また、書簡では「その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。」（11テサロニケ2:8）と予言していた。

その剣は、明確に言えばサーベルまたは長い幅のあるそり身の短剣で、象徴的に、それは激しい戦いのどんな武器にでも用いることが出来ます。そして、これは、勿論主の口から出る火のような裁きのことばに対する言及でもあるのです。こうして、打ち負かすべき「民族」は異邦の民族（異邦人も民族も同じギリシヤ語 *ethnos* の訳）です。ユダヤ民族は、「ヤコブの悩みの日」患難期を通してすでに裁きを受けていました。そして、キリストの来臨の時、長く拒否していたメシヤとしてキリストを受け入れます。差し迫った千年期を通して、これら異邦の民族は、鉄の杖で治められます（黙示録12:5）。「統治」に対応すべきことばは実際に「羊飼いになる」または「牧者」であり、キリストは彼らの牧者ですが、キリストは完全な服従を要求します。キリストは愛の独裁者ですが、独裁者に違いありません。用語はもともと詩篇2章8、9節から来ています。「わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。

あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』

この約束は天におられる御父が御子に与えたもので（詩篇2:7）、主イエス・キリストは、またそれを「勝利を得るもの、また、最後までわたしのわざを守る者」である一人ひとりに与えると約束しています（黙示録2:26, 27）。詩篇作者も「それは、すべての聖徒の誉れである。」（詩篇149:9）と記しています。

もう一度、あふれ流れている酒ぶねと血に浸った（染まった）衣服の挿絵に戻ります。これは黙示録14章14・20節の説明図にありました。しかし、ここに酒ぶねを踏んでおられる方はキリストご自身であると共に体的に告げられている。さらに、キリストがお一人で酒ぶねを踏まれます（イザヤ63:3）。それで、キリストの衣だけが血に浸り染まっていたのです。

酒ぶねは全能の創造主の激しい怒りを描写しています。「激しい」のギリシヤ語は *thumos* で、または「憤慨」とか「怒り」と訳せます。ここで用いられている「怒り」の語は、ギリシヤ語 *orge* で「怒り」とか「憤慨」とか「復讐」となるのです。こういうわけで、二つの用語は本質的には同意語で長い間忍耐してこられた創造主の深い憤慨と復習の思いが解き放たれたことによる二重の激しさを表しています。創造主は報われない忍耐をもって、彼が愛し贖われることを求めてきた人々の邪悪さと反逆と冒瀆を長い時代にわたって耐えてこられました。「わたしが呼んだのに、あなたがたは拒んだ。わたしは手を伸べたが、顧みる者はない。あなたがたはわたしのすべての忠告を無視し、わたしの叱責を受け入れなかった。それで、わたしも、あなたがたが災難に会うときに笑い、あなたがたを恐怖が襲うとき、あざけろう。恐怖があらしのようにあなたがたを襲うとき、災難がつむじ風のようにあなたがたを襲うとき、苦難と苦悩があなたがたの上に下るとき、」（箴言1:24・27）

数億の軍隊が集められている長い谷を力強い風がさつと通過します。それは・立腹した王の口から突き出した鋭い剣だ。炸裂する動脈は血を噴出し、巨大な水桶には血が流れ込み、圧縮され溢れ出ています。「かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪がひどいからだ。」（エシル3:13）

黙示録19章16節 その着物にも、ももにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。

ここに、血に染まった着物の上にもキリストのももにも両刃の剣によって書かれたすばらしい名がなお二つあるのです（詩篇45:3を比較せよ）。キリストが肉体を取って地上にあった時、地上の偉い王の役人たちがキリストの衣をくじ引きにしました（ヨハネ19:24）。このような冒瀆者すべてによってキリストの衣からは血がしたり落ちていたのです。キリストはこれら地の王たちすべての上に立つ王であり、地上のすべての主の上に立つ主であることをあかしすることばが着物にもももにも刻み込まれていたのです。彼は地球にいる征服者たちのように、その腰には剣を帯びる必要はない。なぜなら、彼の剣は口から突き出ていた。したがって、ここには栄光ある創造主を讃えることばが刻み込まれていたのです。

この肩書きは、使徒パウロが将来の「主イエス・キリストの出現」について語った初期に用いた称号でした。パウロはまさにこの光景を一瞥したと思われる。「その現われを、創造主はご自分の良しとする時に示してください。創造主は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、」です（1テモテ6:15）。大淫婦バビロンについて書くと同時に、前もってこれら地の王たちに関し語って、ヨハネは天使のあかしを記録したのです。

「この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」(黙示録17:14)と。キリストは時の王であり、宇宙空間の王であり、造られたすべてのものの王です。人でも天使でも、またサタン自身でさえ単なる被造物に過ぎないのに、キリストに反対できるなどどうして考えられるのでしょうか。

ハルマゲドンの大戦

悪霊たちの霊は、奇跡を行いながら、ハルマゲドンに彼らの軍隊を送るように地の王たちすべてを説得します(黙示録16:13,16)、そこで彼らの大変な敵と闘う準備をするためです。地の王として獸を確かなものとし、サタンをこの宇宙の王座に着かせるための絶望的な最後の企てです。彼らはキリストが今にも地上に降りて来ようとしているのを知っており、彼らは次々とキリストの恐ろしい裁きを経験していました。しかし、もはや救いの望みも機会もありません。従って、彼らは戦うか滅びるかのどちらかしかないので。見たところ、彼らは進軍し、その地の民と小競り合いをし、エルサレムにいる残りのユダヤ人と戦い、恐れながら天が開けキリストが来るのを待っているようです。

黙示録19:17 また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、創造主の大宴会に集まり、

小羊の結婚披露宴に来るようにとの招待状はずっと昔に発行されており、多くの者が応答していました。さて、一つの招待状が他の祝宴・偉大なる創造主の晩餐のために出されましたが、二つの祝宴の違いは何でしょうか。前者の祝宴の客は贖い主の面前で喜びにあふれて食する長い期間に贖われた聖徒たちです。ほかに招待されたのは世界中四方八方からの猛禽と腐肉を食う鳥です。そして、彼らの正餐はハルマゲドンで殺された多くの者の肉と血になるはずす。

この驚くべき招待を大声で叫んでいる天使は「太陽の中に立って」いました。恐らくこのことは、単に天使が太陽の光線の中にいたことを意味します。そうでなければ、背に太陽を受けて地上に立っているかですが、もしその意味なら、わざわざ述べる必要は全くなかったと思われるます。

おそらく、天使は実際に太陽の中に居ました。聖書の中で、天使たちは一般に星々と同じに取り扱われています。創造主のすばらしい統治権で、この天使が太陽そのものを割り当てられていたと考えるのは無理ではありません。このようにして、この天使は地球に特別な関心を持っていましたことでしょう。なぜなら、地球で起こっている物理的・生物学的過程を続けていけるのは太陽から来るエネルギーによるのですから。黙示録16章8、9節を見てわかるように患難期の終わりの日々には激しい炎熱を地上に齎すため太陽を暖める能力があるのはおそらくこの同じ天使だったでしょう。

ハルマゲドンでの非常に大量の死体で汚染された地球をきれいにする課題を成し遂げることの出来るのは、どんなに熱効率を増そうとも太陽エネルギーだけで他の助けなしでは無理でしょう。そこで、天使は、太陽からの地球まで届くような力強い叫び声、しかも、タカとワタリガラス、カラスとハゲワシが聞き理解できる声で世界中いたるところから猛禽類を出勤させます。

呼び声は空を飛ぶ鳥類の大集合のためです。異教徒の軍隊がまずその地に集められました。(ヨエル3:2, 11, ゼパニヤ3:8, ゼカリヤ12:3, 14:2 黙示録16:16), エドムの地ボズラからヨシヤパテの谷へ到大縦隊が、ハルマゲドンでイズレエルの平野を覆ったのです。今や、猛禽類(肉食の鳥)も集まり始めます、しかし空中に、彼らの眼下に横たわったおびたしい人の上を旋回し、そのため空は暗くなつていきます、確かに、地上にいる大勢の兵の心は生気を失い、非常な恐れで満たされていきます。「死体のある所には、はげたかが集まります。」(マタイ24:28)「神(創造主)である主の前に静まれ。主の日は近い。主が一頭のほふる獣を備え、主に招かれた者を聖別されたからだ。」(ゼパニヤ1:7)

黙示録19章18節 王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」

権威ある王たちや勇士たち、あらゆる階級のすべての人は、ハゲワシのための腐肉となります。こうして、人の傲慢さは低くさせられるのです。「まことに、万軍の主の日は、すべておごり高ぶる者、すべて誇る者に襲いかかり、これを低くする。」(イザヤ2:12)

この場面はエゼキエル39章17-20節に描かれているのと非常によく似ています。「神(創造主)である主はこう仰せられる。人の子よ。あらゆる種類の鳥と、あらゆる野の獣に言え。集まって来い。わたしがおまえたたちのために切り殺した者、イスラエルの山々の上にある多くの切り殺された者に、四方から集まって来い。おまえたたちはその肉を食べ、その血を飲め。勇士たちの肉を食べ、国の君主たちの血を飲め。雄羊、

子羊、雄やぎ、雄牛、すべてバシヤンの肥えたものをそうせよ。わたしがおまえたたちのために切り殺したものの脂肪を飽きるほど食べ、その血を酔うほど飲むがよい。おまえたたちはわたしの食卓で、馬や、騎手や、勇士や、すべての戦士に食べ飽きる。——神(創造主)である主の御告げ。——」

似ているため、多くの注解者はこのエゼキエルの文章をゴクとマゴクの戦の結果で、ハルマゲドンの戦いと同じと取っています。しかし、前者は後者の型として意図されているけれども、この解釈はどうも怪しいのです。前者はイスラエルの山々の上であり、後者はハルマゲドンの平野とヨシヤパテの谷にあります。前者はその地の動物すべてを含み、後者は人と軍馬だけです。前者の破壊は創造主の意思によって管理された特質によって、校舎の破壊はキリスとご自身によって直接惹き起こされます。さらに、6章で検討したように、ゴクとマゴクの戦いはほぼ間違いなく患難期のはじめに起こり、ハルマゲドンの戦いは患難期の終わりに起こるのです。

中東の地で最近このような猛禽類の集団が大いに増えていると述べている報告が広く出版されています。これがそうであろうとなかろうと、実際に間もなく空の鳥のために練り広げられる二つの大饗宴があります。ひとつはゴクの軍隊のための饗宴であり、他は獣の軍隊に対する饗宴です。

黙示録19章19節 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。

地の獣と王たちが共に見られる最後のときが黙示録17章13節に記されているようです。そこで王たち

は獸にたいして彼らの権威と力とを患難期の中間に譲り渡していた。したがって、後半の3年半は獸が實質的に世界の王であった。すぐ後に起こる鉢の裁きの衝撃の下、古い竜に指示されたように、獸と偽りの預言者たちは、遂に、すべての王たちにハルマゲドンに彼らの軍隊と共に来るように召集した(黙示録16:13、16)。そのすぐ後、偉大なる主都バビロンが滅ぼされ、これら地の王たちはバビロンの滅亡のことで大いに嘆き悲しんだ(黙示録18:9、10)。

しかし、今や、死海の深みを通り過ぎ、エドム人の旧領土にわたる大集団に膨れ上がった軍勢を伴って、彼らは皆ハルマゲドンと共に集まった。エドム人たちはキリストとキリストの天からの聖徒たちの軍隊の来臨を待っていた。また、竜も彼につき従う悪の軍団と共に、そこにいて、なお創造主が打ち負かされるの望みに対する期待を持って、「創造の王に終わりの力ある猛攻を仕掛け平衡を保っていた。」最後の対決の日がほぼ来ていました。「さばきの谷には、群集また群集。主の日がさばきの谷に近づくからだ。」(ヨエル3:14)「国々よ。近づいて聞け。諸国の民よ。耳を傾けよ。地と、それに満ちるもの、世界と、そこから生え出たすべてのものよ。聞け。主がすべての国に向かって怒り、すべての軍勢に向かって憤り、彼らを聖絶し、彼らが虐殺されるままにされたからだ。」(イザヤ34:1、2)

黙示録19章20節　すると、獸は捕えられた。また、獸の前でしるしを行ない、それによって獸の刻印を受けた人々と獸の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。

地の王たちの軍隊に属する群衆は、彼らの指導者に絶大な信頼を置いており、彼はキリストより実際に偉大であることが判るはずだと考えていたのです。彼らは、彼らの気持ちをもその後変えてキリストに立ち返れるわずかな望みさえも、この選択が切り取ってしまい変更できないことを知っていたながら、獸のしるしを受けることさえ喜んでいたので(黙示録14:9、11)。かなりの程度まで彼らは、獸のカリスマ的人格と彼の副官である世界の卓越した宗教の指導者や預言者によってもたらされた驚くような奇跡によってこの実に重大な決断をするように影響を受けていたのです。この偽りの預言者はエルサレムの神殿に安置した獸の像に命を与えることさえ出来る。それゆえ、総ての人はこの像、すなわち、エルサレムにある原型の像かまたは世界中の家の神社に設置されている像の複製品のいずれかに頭を下げるべきだと人々に思い込ませていたのです。

輝かしい指導力と不可思議な力を執り行うためにそこにいる獸と偽りの預言者、それぞれを持つ地上の軍勢は小羊と彼に付き従う人々が、空にある彼らの巨大な広がりを持つ舞台から降りてくるとき打ち破ることが出来るとなおあわい希望を抱いていたのです。さらに、彼らは礼拝していた竜(黙示録13:4)も、彼らの軍勢と共にそこにいたことを知っていたのです。旋回しているハゲワシと地球全体に及ぶ地震と大いなるバビロンの崩壊の新鮮な記憶にもかかわらず、何とかして、彼らは救い出だされるはずで、預言者の悪魔的奇跡を通して、彼らを欺いたサタン(魔王)は、なお力を握っているとの希望を持っていたのです。

彼らの真ん中から突然、彼らの指導者がぶしつけにも捕らえられるのを見るのはどんなに言語に絶する驚きであったことでしょう！キリストが天使の一団を彼らを捕らえるために派遣したのか、または、彼らはキリストの全能のことばに応じて簡単に捕らえられたのかは記されていません。手段は何であれ、世界中でもつ

とも力があり恐れられていたこれら二人の偉大な人はいなくなってしまうのです。集まっていた群衆は突然彼らを導く人が誰もいない助けのない状態に放置されてしまったのです。天の軍勢の堂々としたアプローチを完全に精神にショックを受けて見詰めた時、彼らは混乱と恐怖に陥りました。

しかし、彼ら群衆の恐怖は、獣と預言者が突然捕らえられ硫黄で煮えたぎる巨大な火の池に想像を絶するスピードで移された時の恐怖に比べると、まったく比較するすべもなかった。彼らは彼らの血肉の体でなお生きている間に、燃えたぎる大釜に投げ込まれ永遠にとどまらなくてはならないのです。

これが少なくとも火の池という名が聖書に特に記されている最初です。言うまでもなく、この恐ろしい場所のところが性質は長年にわたり多くの議論の主題となってきました。池にある火は文字通りの火ですかまたは象徴的な火なのでしょうか。もし、文字通りの火なら、人の体の中で永遠に存在し続けるのでしょうか？もし、象徴的ななら何が象徴的なのでしょうか？もしそれが実際に比喩的ななら、このように大切な比喩的表現を創造主は説明しないままにしておくことがあるのでしょうか。

火の池は明らかに黄泉またはシェオールと同じ場所ではありません。その用語は新約聖書と旧約聖書でそれぞれ『地獄』としばしば訳されています。これは黄泉にいる救われていない死者はまず黄泉から甦りそれから火の池に投げ込まれます（黙示録20:13-15）

すでに検討したように（黙示録1:18、19:1）、黄泉は地球の中心にある大きな淵です。そこに救われなかった人々の霊が第二の復活まで閉じ込められています（黙示録20:5、6、13）。さらに明らかに悪霊の大群もアバドンとかカルタルスと呼ばれる黄泉の部分に同じように閉じ込められています（黙示録9:1-3、11:16、18）。

黙示録19章21節 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

無敵の王と彼の手下の奇跡を行う預言者（聖書は彼らを獣と偽りの預言者と呼ぶ）と考えられていた彼らの偉大な指導者が突然捕らえられ指令所から奪い去られた時、彼らにつき従った軍隊は完全に意気消沈し混乱に陥ってしまった。これは特にルカの福音書でかねて述べられていた場面です。「人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。」（ルカの福音書21章26、27節）

今やすべての希望が完全に去ってしまったことを知って、おびえた群衆は彼らの運命を待ちます。彼らは長く待つ必要はありません。エドムから上って来る者のように威厳のある騎手の口から直接出る鋭い薄切りの剣のように進み、強力な猛烈な風が180マイルに及ぶ人と軍馬の縦隊からなる彼らの軍隊を一掃します。ブドウが酒ぶねで踏まれるように、血が彼らの血管を突き破り突然の死が襲います。間もなく、巨大な桶には血が溢れ、彼の衣服は酒ぶねを踏まれる間に血に染まります。殺された大勢の霊は黄泉に降り、そこで白い大いなる御座での裁きを待つのです。

これは預言者によって長い間予見された世紀の偉大な絶頂に達する戦いです。「あなたの右にいます主は御怒りの日に、王たちを打ち砕かれる。主は国々の間をさばき、それらをしかばねで満たし、広い国を治める

かしらを打ち砕かれる。」(詩篇110:5,6)「悪者どもは、よみに帰って行く。創造主を忘れたあらゆる国々も。」(詩篇9:17)

イザヤの預言のことは恐ろしいものです。「34:3 彼らの殺された者は投げやられ、その死体は悪臭を放ち、山々は、その血によって溶ける……主の剣は血で満ち、……主がボツラでいけにえをほふり、エドムの地で大虐殺をされるからだ。」(イザヤ34:3~6)

預言者エレミヤも同じようなメッセージを伝えていきます「わたしがつるぎを呼び寄せて、地に住むすべての者を攻めるからであると、万軍の主は仰せられる。……『主は高い所から呼ばわり、その聖なるすまいから声を出し、自分のすみかに向かつて大いに呼ばわり、地に住むすべての者に向かつてぶどうを踏む者のように叫ばれる。……叫びは地の果にまで響きわたる。主が国々と争い、すべての肉なる者をさばき、悪人をつるぎに渡すからであると、主は言われる』。万軍の主はこう仰せられる、見よ、国から国へ災が出て行く。大きなあらしが地の果からおこる。その日、主に殺される人々は、地のこの果から、かの果に及ぶ。「ここでの地とは、限局的で土地と訳すほうがよりよい、たとえばエレミヤ25章20節の「ペリシテびとの地」のように」彼らは悲しまれず、集められず、また葬られずに、地のおもてに糞土となる。」(エレミヤ25:29~33)

ゼパニヤ書で主は「わたしは人々になやみを下して、盲人のように歩かせる。彼らが主に対して罪を犯したからである。彼らの血はちりのように流され、彼らの肉は糞土のように捨てられる。彼らの銀も金も、主の怒りの日には彼らを救うことができない。全地は主のねたみの火にのまれる。主は地に住む人々をたちまち滅ぼし尽される。」と宣告しています(ゼパニヤ1:7,18)。ゼパニヤ3章8節をも見よ。

明らかにその時とは、キリストが来る時集まっているすべての軍隊を打ちながら、征服しつつキリストはエドムからエルサレムに上がって来る時のことで、エルサレムに還ったユダヤ人たちが遂に彼をメシヤ・救い主として受け入れる時です。預言者ザカリヤは、それについて次のように告げています。

「その日には、わたしはエルサレムをすべての民に対して重い石とする。これを持ちあげる者はみな大傷を受ける。地の国々の民は皆集まって、これを攻める。主は言われる、その日には、わたしはすべての馬を撃つて驚かせ、その乗り手を撃つて狂わせる。……その日には、わたしはエルサレムに攻めて来る国民を、ことごとく滅ぼそうと努める。わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に、恵みと祈の霊とを注ぐ。彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういごのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ。……その日には、罪と汚れとを清める一つの泉が、ダビデの家とエルサレムの住民のために開かれる。……彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『彼らはわが民である』と言い、彼らは『主はわが神・創造主である』と言つ」(ゼカリヤ12:3,4,9,10,13:1,9 口語訳)

彼らは荒野における一時(黙示録12:6,14:1)の滞在からユダヤ人の改宗者を伴ってエルサレムに帰ってきている144000人の選ばれたイスラエルの民と共にキリストが意気揚々とシオンの山に立つのはおそろしくこの時でしょう。キリストはまた「その日オリブ山の上に立つ」(ゼカリヤ14:4)そこからキリストは昔天に上られた(使徒1:9~12)、大きな地震が引き金になって、湧き水と川が開かれる(ゼカリヤ14:4,8)のです。酒ぶねを踏むためにキリストがハルマゲドンに上っていくべきか否か、いわば、われわれは知らされていない、恐ろしい殺戮が実際に速やかに成し遂げられます。

何百万もの死体が自分の血で覆われて地上に横たわっています。「実に、主は火をもってさばき、その剣ですべての肉なる者をさばく。主に刺し殺される者は多い。」（イサヤ66:16）

その時、雲のように群がる飢えた鳥の大群が天から飛び掛ります。そうして、彼らは、長く創造主を悩ましたかつての傲慢な反逆者の肉と血を飽きるほど食べます。血は徐々にその汚染が清められます。骨は間もなく分解し風に吹き飛ばされます。

これらの節で描写された大虐殺と死の恐ろしい出来事は最初創造主をただ愛に富み支援してくれる祖父のような方として考えている人々の感性を傷つけるかもしれません。キリストは、事実、誰の滅びるのも好まないで、すべての人が悔い改めにいたることを望んでおられる素晴らしい恵みと赦しの創造主です。失われたものに対するキリストの愛は非常に大きく創造主の小羊として苦しまれ罪から人を救うために十字架上で死なれたほごでした。

しかし、彼らが、キリストのことを否定しキリストの名を冒し頑固にキリストの救いを拒否した時、最後の審判の日が来なければならぬのです。「3:1 天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。」（伝道者の書3:1）。創造のための大いなる目的が達成されなくてはならない時が確かに来ます。そして、このことは罪が清められることを必要とするのです。